

表現学系
大

近代小説の表現
四

各論篇
12

芥川龍之介
川端康成

表現学大系

監修 ■ 表現学会

各論篇

第 12 卷

近代小説の表現
江蘇工業学院図書館
永尾章曹著
河村清一蔵
書章

教育出版センター

執筆者（執筆順）

永尾 章曹（ながお しょうそう）広島大学教授

河村清一郎（かわむら せいいちろう）明治大学教授

表現学大系 各論篇第一二巻
近代小説の表現 四

平成三年十一月二十五日 初版発行

監修 表現学会

（代表理事）真下三郎

著者 永尾 章曹

河村 清一郎

発行者 柴 崎 聰

発行所 (株)教育出版センター

発売 (株)冬至書房

〒110東京都千代田区神田神保町二丁目四六

電話〇三―三三四―八四二〇

印刷所 サン・ビルド印刷（株）

目

次

芥川龍之介——文章構成について……………永尾章曹…5

序章 同じ形式を何度も用いる……………7

——『黒衣聖母』を中心に——

一 契機……………7

二 主題の提示……………8

第一章 文章の冒頭について……………19

一 作品の紹介……………20

二 作品の解説……………21

三 登場人物その他の解説……………24

四 事件への導入……………30

五 事件の発端……………34

第二章 文章の展開について……………47

一 複数の話が集合している作品について……………47

——『藪の中』を始めとして——

二 『沼』と『東洋の秋』について……………55

三 『影』と『捨子』について……………62

四	『羅生門』と『南京の基督』について	64
五	『玄鶴山房』について	85
第三章	文章の結末について	90
一	事件の終わり	90
二	後記	99
結章	文章構成の特質とその展開	103
川端康成——『雪國』から『千羽鶴』へ——	河村清一郎	105

序	107
第一章	『雪國』の成立 (一) 109
第二章	『雪國』の成立 (二) 118
第三章	『北越雪譜』と『雪國』 126
第四章	『雪國』の構成 150
第五章	『千羽鶴』の場合 162
	——『續千羽鶴』を中心に——
結語	183

芥川龍之介——文章構成について——

永尾章曹

序 章 同じ形式を何度も用いる

——『黒衣聖母』を中心に——

一 契機

芥川龍之介の短篇『黒衣聖母』は、次のような引用から始まる。

1——この涙の谷に呻き泣きて、御身に願ひをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給へ。……深く

御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くまします「びるぜん、さんたまりや」様——

——和訳「けれど」——

芥川作品には、このように引用から始まるものが少なくない。たとえば、次のようなものもある。

2 たとひ三百才の齢を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、未来永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻の如し。

——（慶長訳 *Guia do Pecador*）——

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘味を覚ゆべし。

——（慶長訳 *Imitatione Christi*）——

（奉教人の死）

3 丈草、去来を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、吞舟に書かせたり、おのおの詠じたまへ

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

——花屋日記——

(枯野抄)

まずこれらがあつて、それから作品の構想が成立したのか、それとも、まず作品の構想があつて、それに従つて、これらが選ばれたものかはわからない。ただ、これらは、形の上では作品の初めにあつて、その意味では、これらを引きかけにして、作品が始まっているように見える。その意味で、かりにこれを契機と呼ぶこととする。ここで大切なことは、まず契機があつて、それから文章が始まるという、同じ形式を何度も用いているということである。

芥川の作品には、このように同じ形式を何度も用いるということが特徴的に認められる。芥川の文章について、まずは、こうしたことを手がかりとして、考察を始めようと思う。

二 主題の提示

『黒衣聖母』には、前掲の「契機」の後に、さらに、いわば前文とでもいふべきものが続いている。次のようである。

4 「どうです、これは。」

田代君はかう云ひながら、一体の麻利耶観音を卓子の上へ載せて見せた。

麻利耶観音と称するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の代りに礼拝した、多くは白磁の観音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶観音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐集

家のキャビネットにあるやうなものではない。第一これは顔を除いて、他は悉く黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸のまはりへ懸けた十字架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。その上顔は美しい牙彫りで、しかも唇には珊瑚のやうな、一点の朱まで加えてある。……

私は黙って腕を組んだ儘、暫くはこの黒衣聖母の美しい顔を眺めてゐた。が、眺めてゐる内に、何か怪しい表情が、象牙の顔の何処だかに、漂つてゐるやうな心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顔全体が、或悪意を帯びた嘲笑を漲らしてゐるやうな気さへしたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇の微笑を浮かべながら、卓子の上の麻利耶観音と私の顔とを見比べて、もう一度かう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顔は、不気味な所があるやうぢやありませんか。」「円満具足の相好とは行きませんか。さう云へばこの麻利耶観音には、妙な伝説が付随してゐるのです。」

「妙な伝説？」

私は眼を麻利耶観音から、思はず田代君の顔に移した。田代君は存外真面目な表情を浮かべながら、ちよいとその麻利耶観音を卓子の上から取り上げたが、すぐに又元の位置に戻して、

「ええ、これは禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云ふ事です。」

「まさか。」

「処が実際さう云ふ事実があつたと云ふのです。」

田代君は椅子に腰を下すと、殆物思はしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向う

の椅子へかけろと云ふ手真似をして見せた。

「ほんたうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい声を出した。（中略）

「ほんたうですか。」

私は再かう念を押すと、田代君は燐寸の火を徐にパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるより外はありませんまい。が、兎も角もこの麻利耶観音には、気味の悪い因縁があるのださうです。御退屈でなければ、御話しますが。——」

そして、この後、その「気味の悪い因縁」の話が語られているのである。ところが、それだけでもない。さらに、その話が終わった後、作品の末尾に、いわば後文とも言ふべきものが続いている、それで作品が終わっているのである。後文は次のようである。

5 田代君はかう話し終ると、又陰鬱な眼を挙げて、ちつと私の顔を眺めた。

「どうです。あなたにはこの伝説が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」
私はためらつた。

「さあ——しかし——どうでせう。」

田代君は暫く黙つてゐた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。唯、それが稲見家の聖母のせるだつたかどうかは、疑問ですが、——さう云へば、まだあなたはこの麻利耶観音の台座の銘を御読みにならなかつたでせう。御覧なさい。此処に刻んである横文字を。——DESINE FATA DEUM LECTI SPERARE PRECANDO……」

私はこの運命それ自身のやうな麻利耶観音へ、思はず不気味な眼を移した。聖母は黒檀の衣を纏つた儘、やはりその美しい象牙の顔に、或悪意を帯びた嘲笑を永久に冷然と湛えてゐる。――

前文と後文とは、「氣味の悪い因縁」の話を中に置いて、その話の語られた場面を作っている。どうしてそのような前文と後文とをわざわざ作らなければならなかったのであろうか。

ここでまず見逃せないことは、前文と後文との間に、前文にあった文句が後文にも繰り返して見られるということである。まず、地の文の場合、前文の「陰鬱な眼つきになりながら」に対する後文の「また陰鬱な眼を挙げて」、前文の「燐寸の火を徐にパイプへ移しながら」に対する後文の「煙の消えたパイプへもう一度火を移すと」というような所作や、前文の「或悪意を帯びた嘲笑を漲らせてゐるやうな」に対する後文の「或悪意を帯びた嘲笑を永久に冷然と湛へてゐる」という様子が繰り返して見られる。そして、このことは、会話文の場合、前文で、「どうです、これは。」と問うことから始まり、この「麻利耶観音」に「妙な伝説」のあることを告げて、「ほんたうですか。」と疑念を起させ、そして、後文でも、「どうです、あなたにはこの伝説が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」となお問い、「さあ――しかし――どうでせう。」となお疑念を保っていることと併せて興味深い。地の文においても、会話文においても一定の傾向が認められるようである。「氣味の悪い因縁」の話によつても、「どうです」という質問から導かれた疑念は解消されはしなかつたのである。

こうしたところで、後文に、「この麻利耶観音の台座の銘」が示される。これの「汝の祈禱、神々の定め給ふ所を動かすべしと望む勿れ」は、疑念が保たれ、何らの進展のなかつた状況に決定的な一つの方向を与えることになるようである。そして、この作品の、作品成立の根拠はここにあると考えられるようである。

前文と後文とは、「麻利耶観音」の持つ超自然的な力に対する疑念を保ち続けることによって、作品の主題を暗示し

続けている。そして、その中で、「この麻利耶観音の台座の銘」によって、一つの決定的な方向を打ち出し、作品の主題を象徴的に提示していると考えられるのである。

このような前文と後文とのあるものは、『黒衣聖母』だけではない。たとえば、『秋山図』もそうである。まず、前文は次のようである。

6 「——黄大癡と云へば、大癡の秋山図を御覧になつた事がありますか？」

或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の惲南田と茶を啜りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覧になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の画の神手である。惲南田はかう云ひながら、嘗見た沙磧図や富春卷が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、——」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、——」

惲南田は訝しさに、王石谷の顔へ眼をやつた。

「模本でも御覧になつたのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角真蹟は見たのですが、——それも私ばかりではありません。この秋山図の事に就いては、煙客先生（王時敏）や廉州先生（王鑑）も、それぞれ因縁が御有りなのです。」

王石谷は又茶を啜つた後、考深さうに微笑した。

「御退屈でなければ話しませうか？」

「どうぞ。」

惲南田は銅鑒の火を掻き立ててから、慇懃に客を促した。

そして、後文は次のようである。

7 「秋山図の話はこれだけです。」

王石谷は語り終ると、徐に一碗の茶を啜つた。

「成程、不思議な話です。」

惲南田は、さつきから銅鑒の炎を眺めてゐた。

「その後土氏も熱心に、いろいろ尋ねて見たさうですが、やはり癡翁の秋山図と云へば、あれ以外に張氏も知らなかつたさうです。ですから昔煙客先生が見られたと云ふ秋山図は、今でも何処かに隠れてゐるか、或はそれが先生の記憶の間違ひに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山図を見に行かれた事が、全体幻でもありますまいし、——」

「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山図が、はつきり残つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、——」

「山石の青緑だの紅葉の硃の色だのは、今でもありあり見えるやうです。」

「では秋山図がないにしても、憾む所はないではありませんか？」

惲王の両大家は、掌を拊つて一笑した。

ここでも、前文と後文とは、「不思議な話」を中に置いて、その話の語られた場面を作っている。そして、ここでも、前文にあった文句が後文に繰り返して見られるのである。まず、地の文の場合、前文の「茶を啜りながら」、「茶を啜つた後」に対する後文の「茶を啜つた」や、前文の「銅鑒の火を掻き立ててから」に対する後文の「銅鑒の火を

眺めてゐた」というような所作が繰り返して見られる。そして、このことは、会話文の場合、前文の「不思議な事になつてゐる」を受けて、後文で「成程、不思議な話です」と認め、前文の「煙客先生（王時敏）や廉州先生（王鑑）も、それぞれ因縁が御有りなのです」を、後文で「煙客先生が見られた」と言い換えていることと併せて興味深い。ここでも、前文の場面は、後文の場面としてほとんどそのまま持ち越され、「不思議な話」をすることによつても、何も解決されはしなかつたのである。

こうしたところで、後文に、「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山図が、はつきり残つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、——」という問いが現れ、それに対する答えが、鮮やかな解決をもたらしているようである。この作品の、作品成立の根拠はここにあると言えよう。ここでも、前文と後文とは、『黒衣聖母』の場合と同じように、作品の主題を導き出しているように思われるのである。

『黒衣聖母』においても、『秋山図』においても、前文と後文とは、あつてもなくてもいいというようなものではなく、明確な役割を持つものであると考えられるようである。そして、それは、「妙な伝説」や「不思議な話」を、単なる伝説や話ではなく、小説として普遍的な意味のあるものに高めているとも考えられるようである。

同種のもものは、さらに見出される。やや趣きの異なるものとして、たとえば、『運』もそうである。『運』には、かなり長文の前文と後文とがある。けじめの行あき等はないが、前文ははつきりと、後文はいつとはなく、それを認めることができる。また、その内容は、前掲の二例のように、後文のどこかについて、主題のありかはこのこと指示できるようなものではないが、同じことが繰り返されていて、それによつて、主題は何かを知ることができるというようなものである。

『運』の前文は、すべて引用するには長すぎる。そこで、引用は、会話文に限ることとし、それも、同じことの繰り